

令和4年度 日本大学危機管理学部 個人研究費 研究実績報告書

所属： 危機管理学部 危機管理学科

資格： 教授

氏名： 先崎 彰容

<p>研究課題名</p>	<p>前期本居宣長に関する基礎的研究—近代日本思想史への影響をふまえて—</p>
<p>研究目的及び 研究概要</p>	<p>江戸期の国学者本居宣長は、近世思想史研究における最大の研究対象として、様々な議論を巻き起こしてきた。と同時に、その議論自体が、一つの思想史を形成し、論じられる対象になるまでになった。例えば、本居宣長は源氏物語に関する理論書を書いている。その源氏物語論を後世の思想家は論じることで、新たな思想史が形成される。丸山眞男や小林秀雄、折口信夫など、近代思想史のビックネーム、彼ら自身が研究対象とされるような思想家たちが、本居宣長を論じているのである。</p> <p>したがって、本居宣長自身を研究対象にするだけでなく、彼ら後世の思想家たちが、「どのように宣長を読んだのか」は、それだけで十分に思想史研究の対象になると言えるだろう。しかし従来の研究では、この点を意識した蓄積は、宣長本人に関する膨大な研究に比べて、著しく遅れているものと思われる。</p>
<p>研究実績の概要</p> <p>研究の進捗状況・得られた成果・今後の課題・研究実績等</p>	<p>本年度は、以上の観点から、宣長自身のテキストの読解を大学入学と同時にやってきた、私自身の研究蓄積に加えて、後世の宣長研究を精査することで、「宣長の思想史」の研究に着手する。それは例えば、戦前と戦後の「ナショナリズム」形成における、宣長の評価の180度の転換を目撃することであり、男性優位の社会に対する「ジェンダー」研究にすら、重要な意味をもつだろう。なぜなら、宣長は通常、ナショナリズムの概念である「日本」の立ち上げに重要な影響を与えたとされているが、彼の「日本」を語りは、男性的原理であるといったジェンダー研究からの立場とは、全く馴染まないものだからである。狭義の「近代」原理から、外れた独自の論理構成で、「日本」を語った宣長が、後世どのように評価されたのか—これが、私の研究テーマになるであろう。</p> <p>以上の基礎的理解を踏まえて、筆者が、本年目指すのは次のような研究方法である。すなわち、江戸期の思想、なかでも「国学」、さらに限定すれば本居宣長の初期歌論研究に対して、その原書を講読するとともに、同時に、「近代」以降の本居宣長に対する研究蓄積そのものを再検討し、いわば、思想史の基礎史料として読み込んでいこうというものである。雑誌『ひらく』への年二回の連載を中心に、新潮選書から出版予定の原稿を書き進めることが作業の中心となる。そして実際、業績を得ることができたことは、次の3—②に明記するごとくである。</p>